



1992年12月

# ニュース

No. 29

日本工学アカデミー広報委員会

事務局：〒101 東京都千代田区岩本町3-8-16  
(東誠ビル8階)

電話：(03) 5820-6771~2  
FAX：(03) 5820-6773

## 平成4年度臨時総会開催さる

### 1. 総会

平成4年度臨時総会は平成4年11月20日(金)14:00から名古屋市千種区池下町2丁目63「愛知厚生年金会館」の牡丹の間において開催された。名古屋に於ける開催は初めての事である。

総会は定刻14:00、桜井専務理事の司会によって始められ、まず、事務局長から「本日の出席正会員は24名、委任状を寄せられた正会員は333名の合計357名となり、会則に示されている正会員総数(569名)の10分の1以上に達しておりますので臨時総会は成立いたします」と報告があり、向坊会長の開会宣言ののち、会則5-16)に基づき会長が議長席に着き、議事が進められた。

議案は1990年9月29日、30日に開催された日本工学アカデミー第2回国際シンポジウムの決算報告であり、桜井専務理事から説明があり了承された。

今回の臨時総会の議案はこの一件のみで、14時15分に平成4年度臨時総会は無事終了した。



開会宣言をする向坊会長

### 2. 各委員会・専門部会からの活動状況報告

臨時総会に引き続き、各委員会、専門部会の責任者から主として定期総会以後の活動状況について報告が行われた。

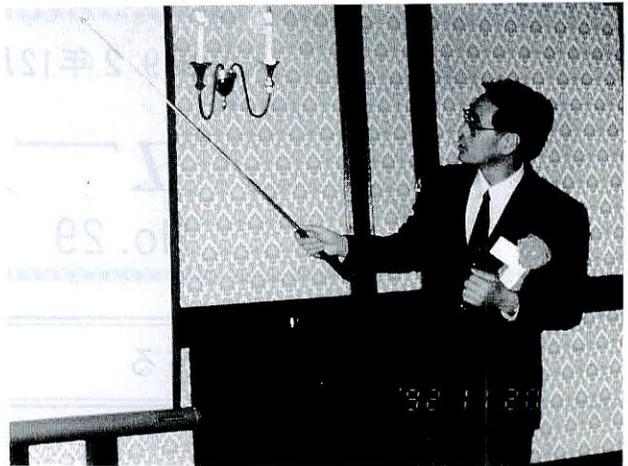
会員選考委員会からは会員増強のための努力について、止むを得ない理由により欠席の中川副会長(委員長)に代わって桜井専務理事が原稿を代読。政策委員会は冨浦理事から談話サロンの予定1件及び10月に行われたシンポジウムの共催の報告、国際委員会は馬場理事から①海外機関との交流、対応について、②日本工学アカデミー第3回国際シンポジウムを1994年春に開催する計画について、③国際委員会の強行について、報告された。広報委員会は大橋理事からニュース、Informationの発行について、情報専門部会からは、小口理事が、平成4年度を期して2つの新たな大項目をスタートしたと報告した。即ち、(1)我が国の情報工学分野の研究レベルの国際的位置付けに関する調査、(2)電子/通信分野における人材育成のあり方の提言、である。材料専門部会は山田理事から材料連合フォーラムとの共同企画等につき、又、バイオ専門部会は、三浦理事が出席できなかったため、同部会長の書面報告を桜井専務理事が代読した。地球環境専門部会については岩佐理事(WG(3))主査)から国土保全と環境改善グループの活動について、更に欠席の清山理事(部会長)に代わり下郷理事から温室効果ガス対策(WG(1))グループの各種活動及び交通運輸対策グループ(WG(4))に於ける来年のスイスでの第10回CAETS総会の準備活動について報告があった。

### 3. 講演会

今回の臨時総会講演は限部会員の司会で(財)日本極地研究振興会の鳥居常務理事(千葉大学名誉教授)と国立極地研究所助教授の矢内桂三博士のお二人により行われ、鳥居講師より我が国の南極研究活動の歴史を軸に北極も含めた極地研究の現状と成果について中広い見地から示唆に富む大変興味深いお話があり、又矢内講師は、南極大陸での隕石の探索とその解析について面白く話された。



特別講演：鳥居鉄也氏



特別講演：矢内桂三氏

#### 4. 懇親会

総会、活動状況報告及び特別講演の後、井村理事の司会で恒例の懇親会に入り向坊会長の挨拶に続いて、来賓の名古屋大学加藤延夫総長のユーモアに溢れた祝詞を頂き、平山副会長の発声で乾杯の後、特別講演の講師も含め歓談した。

今回の名古屋での臨時総会が盛会裡に実施出来たことについては、在名の井村理事の献身的な御努力に負うところが多く、又特別講演の講師のアレンジについては隈部会員のお世話になった。この紙面で御礼申し上げたい。



臨時総会風景

## 平成四年秋の会員の褒章・叙勲

### 文化勲章受章の井深大氏の業績



日本工学アカデミー会員でソニー名誉会長の井深大さんが平成4年11月3日、文化勲章を受章された。

いち早く電子工学に着目していた井深さんは1946年、戦後の荒廃の中で“技術を通じ

て日本の再建と文化の向上に役立てる”という方針を掲げ、東京通信工業（ソニーの前身）を設立、会社の代表者として経営に携わりながら、新技術・新製品の開発と指導にあたられた。井深さんのめざしたものは「自由闊達で愉快的理想工場」の建設であり「他社が真似できない独自の商品」を世に送り出すことであった。井深さんが自ら携わった代表的なものは、日本最初のテープレコーダー、トランジスタおよびトランジスタラジオ、トリニトロンカラーテレビ、家庭用VTRなどである。この中で特筆すべきことはやはりトランジスタとトランジスタラジ

オの研究開発であろう。具体的には、それまでの真空管式ラジオを小型・軽量で携帯型及びポケットタイプのトランジスタラジオに置き換え、その用途を、一家に一台の「家具」からパーソナルな「個人用品」へと換えた事である。トランジスタは当時、もっぱら産業用・軍事用を目的として開発されており、民生用としては補聴器くらいにしか使えないと思われていた。ところが井深さんは、一般の人が家庭で使える大衆製品としてラジオにトランジスタを応用する事を心にきめられた。そして全社を挙げて取り組んだこのトランジスタラジオの開発が実を結び、新しい市場を創り出し、トランジスタという技術を通してエレクトロニクスを一般の家庭に根づかせることになったのである。

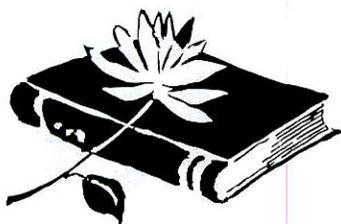
また、トランジスタラジオの小型化に際しては、自ら部品メーカーを回って製作を依頼するとともに、部品メーカーと一体となって開発にあたられた。この時の協力関係が今日までの日本の電子部品産業、ひいては電子産業全体の飛躍的な発展につながったと言っても過言ではない。

このように、井深さんは戦後の日本の代表的な「技術者であって経営者」として、常に独創的な研究開発を重視する創造的な企業活動を行ってこられた。これが外国からの技術導入に頼りがちであった日本の電子産業界に新風を送り込み、自ら産業を開拓すると言う新しい方向をもたらすことになったのである。

さらに、多くの公職、団体の要職に就かれ、その高潔な人柄と相まって、日本の科学・技術、産業、教育、社会福祉および国際関係の向上発展など多方面に貢献されている。

井深さんはすでに3年前、文化功労者として選ばれているが、これ等のことが新しい文化を創造したとして改めて高く評価され、産業人として初めて文化勲章を受章されるに至った。この受章を心からお慶び申し上げるとともに、今後ますますの御健康とご活躍をお祈り申し上げる次第である。

(文責 森園正彦)



## 文化功労者顕彰の向坊隆先生の業績



日本工学アカデミーの会長、日本原子力産業会議会長の向坊隆先生が文化功労者となられた。これは本アカデミーにとっても真におめでたいことと思う。

先生は1939年東京帝国大学工学部応用化学科を卒業、43年に講師となられてから助

教授、工学部長、学長(1977年～81年)と40年近くを東大のために尽くされた。助教授時代、1954年から3年余り、駐米大使館の初代科学アタッシュを勤められ、国際的活動に踏み出された。ワシントン在勤中初の日米原子力協定締結に取組まれ、見事にやり遂げられた。御専門が電気化学でありエネルギー問題にはもともと御関心があったが、これを機に原子力がお仕事のひとつとなった。

帰国されると、東大の原子力教育研究体制の整備に尽力されると共に、新設の日本原子力研究所を兼務された。全国の大学の研究者が原研の優れた施設を利用して研究する仕組みをつくることもされた。1967年、当時のウ・タント国連事務総長の顧問に委嘱され、12ヶ国の専門家と共にいわゆる「核兵器白書」という権威ある報告書をまとめられた。これは核軍拡のさかんな時期に、核兵器を使用した場合の影響、核兵器所有の経済的負担と安全保障上の意義を検討し、感情的政治的視点ではなく、客観的根拠に基づいて核兵器全廃を目指すべきことを論じた画期的なものであった。その後も旧ソ連は核軍拡を続けソ連崩壊の道を歩んだが、今日もこの報告書の意義は失われていない。

1960年代終りの東大紛争では工学部長としてその收拾に努力され、77年から4年間は学長として傷ついた東大を正しく発展させることに貢献された。東大を退かれると、原子力委員会委員長代理となられ、十年余この任にあたられた。原子力委員会の重要な仕事の一つに「原子力開発利用長期計画」をほぼ5年毎に改定することがある。先生はこの改定の指揮を2回とられたが、1987年の改定では「創造的科学技术の育成」を基本目標の一つとされ、内外の評価を得た。この路線はその後順調に育ちつつある。

先生の国際的活動は広範で、日中協会会長、日米

科学協力委員会共同議長など枚挙にいとまがない。国内では日本工業教育協会会長など多方面で活動されている。また先生が育てられた多数の研究者・技術者が各方面で活躍している。今後の御健康を祈り、高所からの御指導をお願いしたいと思う。

(文責 大山 彰)

勲一等瑞宝章受章の  
飯田庸太郎氏の業績



飯田庸太郎会長は大正9年にお生まれになり、一高から東京帝国大学第一工学部に進み昭和18年9月同大学ご卒業、直ちに三菱重工業株式会社に入社された。主として原動機事業関係の要職を歴任されて昭和52年取締役、昭和56年常務

取締役、昭和58年取締役副社長、昭和60年には取締役社長に、また平成元年よりは取締役会長に就任された。

会長のご功績は極めて顕著且つその分野は多大で三菱重工業株式会社を通じ、我が国の経済発展・技術の向上等に貢献されたものの概要は、次の通りである。すなわち、

(1)航空機・宇宙機器の開発によるものとして(ア)F-15J ジェット戦闘機の生産、次期支援戦闘機(FS-X)の日米共同開発の実現、地对空ミサイル「ペトリオット」の量産等による我が国防衛力の強化。(イ)中型旅客機「ボーイング767」の生産を通じ、航空機業界の発展、航空機技術の水準向上。(ウ)H-1ロケットの開発・打上げ、米国宇宙ステーション開発への参画による宇宙開発、宇宙技術の向上とともに通信・放送・気象観測・科学調査分野への寄与。

(2)火力発電・原子力発電等エネルギー供給機器・プラントの開発・製造によるものとして(ア)エネルギー源多様化、省資源の観点から、LNG専焼火力・石炭専焼火力・ガスタービンと蒸気タービン併用による高効率複合火力発電プラント及び大型揚水発電プラント等の開発・建設・運転を通じての技術の確立。(イ)我が国の将来の中心的エネルギーになる原子力発電所(加圧水型軽水炉)を相次いで建設・改良標準化し、廉価な電力の供給と国民経済の発展への寄与。さ

らに新型転換炉、高速増殖炉、核融合炉などの開発への貢献。

(3)各種船舶の建造・開発によるものとして(ア)大型超省エネ船、LNG運搬船等の開発・建造による世界交易及び経済の発展。(イ)戦後の初の大型クルーズ船の開発・建造を通じての国民生活の向上。(ウ)「しんかい6500」をはじめとする最新鋭の海洋調査研究船等の開発・建造による海洋開発及び科学の進歩への寄与。(エ)世界初の洋上石油備蓄船の建造による我が国のエネルギーの安定供給への貢献。(オ)潜水艦、ミサイル護衛艦などの建造による我が国防衛力強化への寄与。

また審議会委員等政策委員としての活動を通じ、政府施策に貢献したご功績も大きく、通産省航空機械工業審議会委員、資源エネルギー総合エネルギー調査会委員、科技庁原子力委員会参与及び専門部会専門委員等、幾多の公職を歴任され国策の策定に携わられた。

さらに関連団体役員としての活動を通じて産業経済の発展に尽力されたご功績も多大で、(ア)日本航空宇宙工業会会長、(イ)日本経営者団体連盟副会長、(ウ)日本造船工業会副会長、(エ)日本原子力産業会議常任理事、(オ)経済団体連合会常任理事、(カ)日本原子力学会評議員、(キ)次世代金属複合材料研究開発協会理事長、(ク)中東協力センター理事長、(ケ)日本橋梁建設協会会長、(コ)ダム堰施設技術協会会長などをはじめ各種団体の役員を歴任された。

幸いにして会長はご壮健であられる。一層ご健康にはご留意下さり、これからの世界の経済・産業ならびに工業技術の発展のため益々ご活躍されることを切に念う次第である。(文責 植田昭二)



## 勲一等瑞宝章受章の 今井功先生の業績



今井功先生は1914年（大正3年）10月7日に旧満州の大連市に生まれ、神戸市で少年時代を過ごし、第一高等学校を経て、1936年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業された。ただちに大阪帝国大学理学部で友近晋教授の助手をつとめられた

たのち、1938年に東京帝国大学理学部に講師として戻られ、1942年助教授、1950年教授、1975年に定年退官、東京大学名誉教授となられた。その後ただちに大阪大学基礎工学部に移り、3年後退官ののち、再び東京で工学院大学教授として1987年の退職まで教壇に立たれた。この五十年にわたる大学での御活躍の期間に、東京大学工学研究所、同航空研究所の所員を併任、欧米の諸大学・研究所の客員教授を歴任されている。

先生の研究は多岐にわたるが、まず流体力学の分野では、高速気流の理論、粘性流体の理論、電磁流体力学などの理論に関して、世界にさきがけて画期

的な論文を次々に発表して世界の注目を集められた。これらの研究に対しては、1951年に朝日文化賞、1959年に日本学士院恩賜賞を受け、1979年に文化功労者に選ばれ、1988年には文化勲章を受けられた。しかし、先生の学術的業績は、先生を単に理論流体力学者と呼ぶにははるかに幅が広く、その卓抜した数理解物理的発想と数理解析の能力とを見事に融合させて、複素関数論の応用の領域を広げ、超関数論を非数学者にも使える形に整え、電磁気学や力学を統一的に再構成するなど、広く数理解物理学の重要な領域において多大の貢献をされた。

これらの仕事は多数の論文と著書にまとめられているが、一貫して、透徹した洞察と明快な論理に裏づけられて、きわめて自然に理論の展開がなされていることが特長である。このことはまた教育の上にもはっきり現れ、先生の名講義と温厚な人柄に深い感銘を受けた後進の数はきわめて多い。

また、学術行政の方面では、先生は日本物理学会会長、学術会議物理学研連委員長、同力学研連委員長、さらに国際純粹・応用物理学連合副会長、同理事等の要職を歴任されている。

なお先生は、若い者をしのぐほどお元気で学者としての毎日を送っておいでである。もはや何事にもわずらわされない自由な立場でいつまでも御活躍頂くことを願ってやまない。（文責 高見頼郎）

## 講演会－第45回談話サロン「これからの工業と工学」

日時：平成4年10月9日（金）

場所：福岡市内ガーデンパレス

講師：生井武文会員

東亜大学学長、九大名誉教授



生井講師（機械工学専攻）は、これからの製造技術の展開はいかにあるべきかという観点から論述されたが、従来の量産経営方針は利率が低いばかりでなく、国際的には摩擦を生じやすい。魅力的サービスを含む市場創造が、これからの活路であるとされた。

この観点による着目すべき技術開発例として、(1)運輸省の呼びかけによるテクノスーパーライナー、(2)東京製鋼による電気炉、(3)天然ガスによる燃料電池をあげ、それぞれの技術的メリットを解説された。

(1)は荷重価値の高い製品を、その日のうちに、拠点都市に届けられることになり、(2)は高炉とは違って徹底した無人化、省力化が可能であるばかりでなく、高温（2000℃）で焼くことによって効率の高いリサイクルが可能で、(3)は電気自動車と違って高馬力（120～130HP）の自動車への応用が可能であ

るとされた。

さらに知的材料（インテリジェンス・マテリアル）の技術開発の現状を紹介された。このあと出席会員との間で、熱心な質疑応答がかわされた。

当日は桜井宏専務理事が出席され、前述の講演に

先き立って、日本工学アカデミーの創設の経緯とこれからの計画について、初めて聞くエピソードを混じえて解説され、出席会員に深く感謝された。

（文責 山内豊聰）

---

---

## 講演会－第47回談話サロン 「産業競争力と研究および教育について」

---

---

日 時：平成4年9月25日（金）

場 所：弘済会館

講 師：Prof. Julian Szekely, MIT 教授

演 題：「産業競争力と研究および教育について  
－技術分野におけるアメリカと日本との  
相互作用に関する一考察－」



9月25日にMIT教授であり又全米工学アカデミーの会員でもあるJ.セカッリ博士を迎えて「産業競争

力と研究及び教育について」との題目で開催された。セカッリ教授はMITの材料科学・工学科で、材料プロセスの数学モデル化について研究されている。この方面では世界的な学者であるが、語学に堪能である事でも有名で、英語、ドイツ語、ハンガリー語は特に原稿なしで、ロシア語、日本語、フランス語は原稿を用意すれば講演出来るとの事である。今回は同教授が日米技術関係についても発言が多く、又国際会議で来日されたのを機会に日本語での講演をお願いした所、快諾されて実現したものである。講演に先立ち旧知の不破祐会員からセカッリ教授の御紹介があって講演に入った。日米の技術関係について教育問題も含めた広い視野からの、十分に準備された講演があり、盛会であった。多数の会員に多大の感銘を与えた。なお同氏の講演原稿は、当日の講演より相当長く、割愛された部分にも興味のある内容が含まれているので、広報委員会で検討の結果、全文をインフォメーションとして印刷配布する事になった。

---

---

## 講演会－第48回談話サロン 「全米アカデミーの歴史と活動」

---

---

日 時：平成4年10月15日（木）

場 所：弘済会館

講 師：Dr. Martha C. Harris,

米国NRC日本課長

Dr. William Colglazier,

同外国部長

演 題：「全米アカデミーの歴史と活動」

第48回談話サロンは10月15日夕食をはさんで米国国立研究評議会（National Research Council）のコルグレイザー外国部長とハリス日本課長を講師として「全米アカデミーの歴史と活動」をテーマとして開催された。この講演は前広報委員長の乾崇夫会員から、会員の中には外国のアカデミーの活動に興味を持つ会員が多いのではないかと示唆があっ



て企画されたものであるが、ハリス課長が日本語が堪能であるので特にお願いして、同課長の来日を機に行われたものである。講演はハリス課長が題目の

趣旨に沿って約1時間日本語で行ったが、同課長は流暢な日本語で、全米工学アカデミーを中心に、その元になった全米科学アカデミー、又最近設立された医学インスティテュートとの三団体共同の政府委託調査研究受託機関である国立研究評議会を含めた4団体の活動を歴史的に概観したもので、日本工学アカデミーの今後の活動の参考にもなる有益なものであ

った。講演後コルグレイザー部長とハリス課長の両氏が答えにくい微妙な質問にも素直に本音を出して質問者の意図に沿った回答をされていたのが印象的であった。講演と質疑応答の内容はインフォメーションとして印刷、全会員に配布の予定である。

(文責 桜井 宏)

---



---

## 新入会員の紹介

---



---

第2分野	茅 陽一	東京大学工学部教授	中島 浩衛	新日本製鉄株式会社技術開発本部フェロー
	齋藤 正男	東京大学医学部医用電子研究施設教授	水谷 幸雄	徳山曹達株式会社常務取締役、研究開発本部長
	高木 幹雄	東京大学生産技術研究所教授	第4分野(関川 泰弘)	第3分野再掲
	多田 邦雄	東京大学工学部電子工学科教授	第5分野 阿部 光延	新日本製鉄株式会社技術開発本部フェロー
	濱崎 襄二	東亜大学大学院教授	井上 泰	新日本製鉄株式会社フェロー
	正田 英介	東京大学工学部教授	梶岡 博幸	新日本製鉄株式会社技術開発本部
	水町 守志	東京大学工学部電子工学科教授	(中島 浩衛)	第3分野再掲
第3分野	上垣外 <sup>かみがいと</sup> 修己	(株)豊田中央研究所取締役副所長	第6分野(水町 守志)	第2分野再掲
	関川 泰弘	栗田工業株式会社常務取締役、研究開発本部長		計14名

---



---

## 外国アカデミー等出版物リスト

---



---

前回お知らせ分以後のリストです。御覧になりたい方は事務局までお申し出下さい。

Global Environment and Energy Issues - Proceedings. Seiyama, T. Ed. Proceedings of Fukuoka International Symposium '90, November 19 - 21, 1990, Fukuoka. The Electrochemical Society of Japan, 1990. 367pp.

Supplement of the Proceedings Fukuoka International Symposium '90. 124pp.

Indian National Academy of Engineering - The Year Book 1992. 100pp.

Japan's Growing Technological Capability - Implications for the U. S. Economy. Arrison, T. S., C. F. Bergsten Eds. Washington, D. C., National Academy Press, 1992. 235pp.

Linking Trade and Technology Policies - An International Comparison of the Policies of Industrialized Nations. Harris. M. C. & G. E. Moore Eds. Washington, D. C., National Academy Press, 1992. 166pp.

New Views on Innovative Activity and Technological Performance - An innovation survey of Swedish manufacturing. Royal Swedish Academy of Engineering Sciences (IVA), 1992. 48pp.

Policy Implications of Greenhouse Warming, National Academy of Sciences, National Academy of Engineering and Institute of Medicine. Washington, D. C., National Academy Press, 1991. 127pp.

Risk Management and Risk Assessment in Different Sectors in Denmark.

Proceedings from the ATV Conference "Risk Management, Hazard and Risk Assessment in Connection with the Setting of Limit Values for Chemicals" March 3-4, 1992, Denmark. Danish Academy of Technical Sciences, 1992. 233pp.

The Technological Future - An Executive Summary of the 9th CAETS Convocation, Danish Academy of Technical Sciences, 1992. 83pp. (事務局に若干のコピーがありますので、お分けできます。)

Technical Resource Information for Central and Eastern Europe - A Directory of Public and Private Sector Technical Assistance and Exchange Initiatives for the Engineering Community, CAETS. Washington, D. C., National Academy Press, 1992. 162pp.

[ニューズレター・年報]

Building and Civil Engineering Research Focus (Newsletter). Oct.(1991), London.

The Fellowship of Engineering Annual Report. (1991/92), London.

Newsletter/The Canadian Academy of Engineering, Summer (1992).

---

---

## お 知 ら せ

---

---

### 第3回日本工学アカデミー国際シンポジウム開催

本会主催による第3回国際シンポジウムが、持続可能な開発と冷戦終結後の世界政治の中で、技術移転と技術拡散が如何にあるべきかについて考えるため、開催されることになりましたのでお知らせします。

日 時：平成6年3月後半

場 所：横浜

テーマ：技術移転と技術拡散 - 過去、現在、未来

Technology Transfer and Technology  
Diffusion - Past, Present & Future

平成4年9月21日開催の理事会において準備委員

会委員長には植之原国際委員会委員長を、組織委員長には猪瀬副会長をお願いすることが決議され、メンバーの内諾を得て大部分の準備委員会委員を委託しました。現在組織委員会の人選を進め、1993年早々には組織委員会を編成するとともに、準備委員会は実行委員会として発展的に編成変えをし、招待講演者を確定、依頼することになります。また、1993年春頃までに予算、資金計画等を作成すべく準備を進めています。委員名、シンポジウムの詳細等、決定次第本紙でお知らせします。

### Charles Stark Draper賞推薦募集

標記のDraper賞は隔年に授与される世界最大の工学技術賞であります。米国のNAEでは1993年度の推薦を募集して居り、日本工学アカデミーにも推薦依頼が来ています。受賞者にはゴールドメダルと

\$ 375,000が授与されます。推薦期限は1993年2月26日です。詳細は日本工学アカデミー事務局までお問い合わせ下さい。

## 工業教育に関する講演要旨のコピー

ニュース第28号において“講演懇談会報告”として掲載されました米国教育協会のBowen会長及びHuband事務局長の講演の要旨が、(株)日本工業教育協会発行の協会誌「工業教育」第40巻、第5号(1992年9月)に掲載されております。御希望の方は同社の

御好意により、そのページ(pp.36-39)のコピーをお分けできますので、日本工学アカデミー事務局までお申し込み下さい。

(TEL 03-5820-6771、FAX 03-5820-6773)

## 新事務所のご紹介

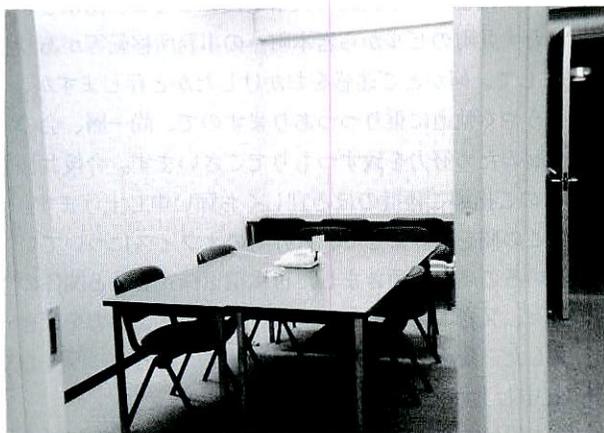
先般、新事務所における会員の皆様へのサービスにつきましてお知らせを差し上げましたが、今回はビルの外観と事務所内のスナップをお目にかけます。



8階の左奥が日本工学アカデミー事務局



執務風景



会員室





編集後記

師走も半ばとなり、今年も残すところ僅かとなりました。

顧みますと今年も、予定されておりました事業活動を、ほぼ順調に実施することができましたことは、ご同慶の至りであります。これは偏えに、会員の皆様のご努力とご協力の賜であると深く謝意を表したいと存じます。

今年はまだ、事務局の人事や長いことお世話頂きました大井町のビルから岩本町への事務所移転等がありまして、何かとご迷惑をおかけしたかと存じますが、ようやく軌道に乗りつつありますので、尚一層、会の発展のため努力を致すつもりでございます。今後共皆様のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

この欄を借りまして、大井町のオフィスについていろいろご高配を頂きました日本電気株式会社と関係の方々、又岩本町のオフィスについて種々ご協力を頂きました三菱マテリアル株式会社と関係の方々にお礼申し上げます。

本号は、過日盛大に行われました今年度の臨時総会の報告、活発に行われました談話サロン、また新しくお迎え致しました会員のご紹介などをお届けすることになりました。ご意見やご要望をお寄せ頂ければ幸いです。

末筆となりましたが、皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念致しますと共に、どうぞ清々しい新春をお迎え下さいますよう、お祈り申し上げます。(編集子)

日本工学アカデミー事務局御案内図

